

18. 僕の不思議な夏

敦賀市立栗野南小学校

6年 前田 涼野



各務原市立鵜沼第三小学校

6年 真柄 明日佳 手塚 あゆみ 玉木 千聖

石黒 佑季 香取 陽向 野田 英里子

僕がここに来て、いったい何日たったんだろう？

ここはいったいどこなんだろう？

ここにいる僕以外の人間は『変人』ばかりだ。バナナだけを食べ続ける男の子。ずっと本ばかり読んでいる女の子。かん高い声で歌を歌い続けているおばさん。わけのわからないことをぶつぶつ言いながら、パソコンのキーボードを叩いているおじさん……。とにかくここで出会った人はみんな変わっていた。

変わっているのは人だけじゃない。ここには『時間』がない。だからどれくらい時間がたったのか、今日が何日で、今、何時なのかまったくわからないのだ。

もちろん僕は聞いてみた。

「ここはどこですか？」

「今、何時ですか？」

けれどまともに返事をしてくれない。それどころか、おかしいことを聞くやつだと言わんばかりに、ばかにした目でぼくを見る。

ここにいる人たちにとっては、僕こそが『変人』そのもののようだ。

僕の名前はカヤ。勉強も運動もいまいちで、これといって人に自慢できるようなことが何一つない平凡な小学六年生。みんなからは『カヤ』じゃなく『カゲ』って呼ばれる。存在感がなくて、暗いからだそうだ。

夏休みに小学校生活最後の思い出になるようにと、両親にサマーキャンプに行くようにすすめられた。僕は気が進まなかったけれど、これと言って断る理由が見つからなかったので、行くことにした。

みんなが水着に着替えて海で泳いでいるのを、僕は岩場の上でぼんやり眺めていた。運動の苦手な僕は当然泳げるはずがない。

何もすることがない僕は、岩場の貝を拾うことにした。貝を拾うことに夢中になって、思わず足を滑らせた。

そこまでは、鮮明に覚えている。けれどそこから先どうなってしまったのか何も覚えていない。

足を滑らせた勢いで、岩に頭をぶつけてそのまま気を失ってしまったのだろうか？ ずいぶん長い間眠っていたようにも感じるし、すぐに目が覚めたようにも思う。ただその眠りの中で僕は夢を見ていた。

真っ黒なやみの向こうから、かすかに声が聞こえてくる。

「た・す・け・て」

最初、何を言っているのかわからなかったけれど、確かにそう言っていた。今にも泣き出しそうな声だった。

何度も繰り返しながらそう言っている声の方へ、僕は近づいて行った。そこにいたのは、僕と同じ年くらいの髪の長い女の子だった。

「ずっと待っていたのよ、カヤ！」

そこで僕は目を覚ました。さっきまで確かに僕は岩場において、海で泳ぐみんなを見ていたはずなのに、気がつくと、そこは草原だった。僕はまだ夢を見ているのかと、何度もほっぺをつねってみた。

「痛っ！」

何度つねっても、やっぱり痛かった。僕はなぜこんなところで眠っていたのか、さっぱりわからないでいた。ずいぶん長い時間、草原の真ん中で座り込んでいたら、突然、ものすごく不安な気持ちが押し寄せてきた。心の中がザワザワして、(とにかく、家に帰らなきゃ) と思って思った。

そこがどこなのかさっぱり分からないけれど、とにかく歩きだした。

歩いて、歩いて、歩きまくった。けれど、どんなに歩いても何も変わらず、あたりは草原が広がっていた。今まで生きてきて、こんなに歩いたことはないだろう。

(もうダメだ、一步も歩けない) と思ったその時、遠くの方にポツンと家の煙突が見えた。僕は、もう一步も歩けないはずのその足で走った。

「こんにちは」

「……」

確かに家の中には誰かいるはずなのに、何も返事がない。歩きつかれていた僕は、おかまいなしにその家の扉を開けた。中には男の子と女の子、そしてその両親らしいおじさんとおばさんがいた。けれど、僕のことなんかには全く気付かないといった様子で、誰一人僕の方を見ようとしめない。男の子はバナナを食べ続け、女の子は本を読み続け、おじさんは一心にパソコンのキーボードをたたき、おばさんは歌い続けている。

この何とも奇妙な光景に少し驚きながらも、やっと人間に会えたという安心感から、急におなかがすいてきた。(あー、何か食べたいな) そう思って食卓に目をやると、そこには今まで食べたこともないようなご馳走が並んでいた。

「あの一、すみません。何か食べさせてもらえませんか？」

かん高い声で歌い続けているおばさんに向かって聞いてみた。けれど、何も答えてくれない。僕は我慢の限界にきていたので、

「これ、食べてもいいですかっ！！」

と、力いっぱい大きな声で言った。すると、おばさんはとても不機嫌そうな顔をして、「勝手に食べればいいでしょ！ あんたが食べたいと思ったんでしょ。変な子ね」

と言った。僕はどうして怒られなければいけないのか理解できなかったけれど、そんなことをゆっくり考えていることが出来なかった。そして、食卓のご馳走を夢中になっ

て食べた。

おなかがいっぱいになって、ふとある事に気付いた。ここに来てずいぶん時間がたっているはずなのに、ちっとも夜にならない。僕は、恐る恐るおばさんに聞いてみた。

「今、何時ですか？」

「ここはどこですか？」

するとおばさんは、僕の顔をじろじろと覗き込んで、

「本当に変わった子だね」

とだけ言って、また歌いはじめた。

僕はこれからどうしたらいいんだろう？ 途方にくれていると突然、誰かが僕を呼んだ。

「カヤ」

ふと窓の外を見ると女の子が立っていた。僕はその子を知っているはずがないのに、なぜか懐かしい気持ちになった。そして次の瞬間、

「あっ」

夢の中に出てきた女の子だと確信した。僕はあわててその家を飛び出した。飛び出したのはいいけれど、僕はその子と友達でもなければ、知り合いでもない。とまどっている僕に女の子は、

「私の名前はロコ。カヤ、あなたが来てくれるのをずっと待っていました」

と言った。こんなとき、なんて返事をしたらいいのか、頭の中が混乱しすぎて、だまされたままの僕に、

「カヤなら、きっと私を助けに来てくれると信じていました」

きらきらした目でそう続けた。

「君は誰？ どうして僕のことを知っているの？」★

僕はわけのわからないままそう聞き返した。ロコと名乗る少女は、深く息を吸って話し始めた。

「すべては私のせい……。そう、私があんな病気にさえかからなければ……」

ロコの黒い瞳から涙があふれた。

ロコの住む国オーパスは、平和で豊かな国だった。ロコの父はオーパスを治める国王、国民は王を慕い、尊敬していた。ロコはその一人娘で、だれからも愛される聡明な王女だった。

ところが、ある晩ロコは突然の高熱におそわれた。あらゆる医者がどんなに手を尽くしても熱が下がらない。王は苦しんだ。かわいい娘の命を救ってくれるのなら、どんな代償だって支払う。そんなおふれを国中に出した。

「これを聞いたのが魔女ジャスだったの。ジャスは魔法の薬で私の病気を治してくれたわ。でも、その代わりにオーパスの国から時間を奪っていった。その日からオーパスの人々は変わってしまったの。魔女ジャスは、時間を奪い、みんなの心をばらばらにして、国を滅ぼそうとしている。ねえ、カヤ、お願い。私を助けて。あなたならきっとできる。考えてほしいの。時間を取り戻す方法を……」

「僕にそんな力なんてないよ。僕は勉強も運動も苦手だし、不器用だし……」

僕ならできるなんて言われても、何にも思いつかない。絶対無理だ。出るのは冷や汗ばかりだ。

「ジャスの魔法を解く鍵は分かっているの。どんなことでもいい。オーパスの人々全員が心を一つにして、同じことを願えばいいの」

「無理だよ、そんなこと。だって今のオーパスの人たちは、みんな自分勝手でさ、人の話なんて聞こうともしない。僕に説得する力なんてないよ」

僕は額の汗を拭こうと、ポケットのハンカチを取り出した。ハンカチからパラパラと何か黒い粒がこぼれた。種？ そう、これは朝顔の種。思い出した。サマーキャンプに出発する朝、妹のサヤが何か言ってたっけ。おにいちゃん、しばらく会えないからサヤの宝物を持ってって、とかなんとか……。サヤったら、いつの間にこんな所に……。

「その黒い粒は何？」

ロコが聞いた。

「朝顔の種だよ。見たことないの？ 朝早い時間に、ラッパみたいな形のきれいな花を咲かせるんだ。オーパスには、朝顔は咲かないの？」

僕は自分でそう言って、あっと声を上げた。

（朝顔だ。オーパスの人たちは時間を忘れているけれど、朝顔は朝を忘れない。朝顔の花を咲かせればいい。サヤ、おまえのおかげで何とかかなりそうぞ）

僕はロコといっしょに城壁の周りに種をまいた。サヤの宝物の種は、百個近くもあっただろうか。僕たちは丁寧に丁寧に埋めた。最後に水をかけるとき、ロコは薬を水に混ぜた。

「私の病気を治したジャスの魔法の薬よ。きっと命を吹き込んでくれるはず」

不思議な光景が目の前に広がった。百本の緑の芽が地面からわきあがるように起き上がり、みるみるうちに城壁につるが伸び、葉が生い茂った。城壁は緑の葉でおおわれ、あちこちに花のつぼみが姿を現した。

「さあ、オーパスの人たちに知らせよう。城の周りに集まるように、明日の朝、今までに見たことのないすばらしいものが見られると」

カヤとロコの話は、オーパスの人々に伝わっていった。歌の大好きなおばさんは大きな声で歌った。

「明日の朝、すてきなものが見られるわ」

パソコンに夢中のおじさんは、その歌を聞いてメールをみんなに送った。

「明日の朝、城の周りで何かが起こる」

バナナを食べ続ける少年は言った。

「へえ、バナナを食べながら行ってみようかなあ」

本に夢中の少女も言った。

「本を読みながら行こうかしら」

そしてみんなは思った

「朝？ なんだかなつかしい言葉だ」

陽がすっかり沈んだ頃、僕とロコは国中の明かりを消した。電気を止めた。

「どうなったの？ 本が読めないじゃない」

「パソコンが消えたぞ」

「マイクのスイッチが入らないわ」

「バナナはどこだあ？」

「こう暗くては仕方がない、眠るとするか」

翌朝、城の周りで起きた奇跡を、僕は一生忘れないだろう。オーパス中の人々が城の周りに集まっていたこと、城壁に赤や青の朝顔の花が、次々と開いていったこと、そして人々は同じことを心に思った。

（ああ、なんて美しいんだ。この美しい光景を、明日の朝もまた見たいものだ）

ジャスの魔法は解けた、と思った僕は急に眠くなった。遠くでロコの声がするような気がした。

「カヤ、ありがとう。また会いましょうね」

目を覚ますと、お父さんとお母さんの顔があった。

「気が付いたか。よかったよかった。岩に頭をぶつけて意識がないと連絡を受けたときには、お父さんもお母さんも生きた心地がしなかったよ」

「サヤはどこ？ ぼく、サヤにお礼を言わなくっちゃ」

「いつもけんかばかりしているのに、やっぱりきょうだいね。サヤは家でおばあちゃんと留守番してるわ。お兄ちゃんがよくなるようになって、ほら、こんなお守りを……」

画用紙に「おにいちゃんのはやくげんきになりますように」という言葉と朝顔の花がクレヨンでかいてあった。

それからの僕は、少し変わったかな。自分ではよく分からない。でもいつの間にか「カゲ」って言われなくなった。大きい声で話すことができるようになったからかな。だってあのとき、ロコといっしょに、必死に伝えたんだもん。おばさんの歌声に負けないぐらいに大きな声でね。

変わったことと言えば、もう一つ……。

新学期、一人の転校生を先生が紹介した。

「朝倉ロコさんです」

ロコは僕を見てにこっと笑った。あれは夢じゃなかったのかもしれない。